

呼応する身体
－ 省察的実践家のリハビリ論 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
奥野 景子

筆者は、理学療法士としてリハビリテーション（以下、リハビリ）に従事している。近年、Evidence Based Medicine の科学性が過度に重視され、それに警笛を鳴らすようなかたちで重要性が訴えられているのが Narrative Based Medicine（以下、NBM；物語に基づく医療）である。NBM では、患者を「物語る主体」として尊重する一方で、医学的な疾患概念なども一つの「医療者側の物語」と捉え、治療は両者の物語をすり合わせて「新たな物語」を共同構築するものとしている。

本研究では、筆者が理学療法士として携わってきたリハビリにおける省察的実践を NBM の医療者側の物語として記述し、省察的実践の視点から理学療法の実践を捉えていく。そして、そこからリハビリにおける省察的実践の重要性について検討し、省察的実践家の視点から既存の医療に対する疑問について考え、新たなリハビリ論を構築することを目的とした。

症例を通した省察的実践の記述は、筆者の記憶に基づいて合計 10 症例について行なった。症例を通した省察的実践は「リハビリ論への疑問」、「リハビリの対象について考える」、「痛み」、「共同構築されるリハビリ」、「リハビリとは何か」というテーマに分類して記述し、各実践から得られたテーマについて考察した。具体的には、既存の課題（教育、パターンナリズム、インフォームド・コンセント）、実践的課題（リハビリの対象について、痛み、医学的情報の重要性、身体を介した会話、‘今ここ’の重要性、当事者に臨む姿勢）、社会の課題（社会の医療化）について考察し、これらのことを踏まえて省察的実践家の視点から‘呼応する身体’としての自分自身、リハビリ論について述べた。

症例を通した省察的実践からは、理学療法士である筆者と当事者が互いに呼応しながらリハビリを共同構築してきた過程を捉えることが出来た。そこでは、当事者と筆者のやり取りの循環が行なわれていた。そして、その場に臨む筆者は、理学療法士としてではなく‘呼応する身体’として存在していると考えられた。

また、本研究を通して、リハビリは‘生きることの支え’になり得ると考えられた。‘生きること’とは、身体が生命体としての機能を有しているだけでなく、社会における様々なものや人との関係性の中で、それらや自分自身、過去や思い描く未来に呼応しながら‘今ここ’に存在することだと考える。‘今ここ’を‘生きること’を妨げる何かがあった場合、それに向かうための一つの手段としてリハビリは機能すると思われる。‘今を生きることの支え’としてのリハビリでは、当事者に応じたリハビリのかたちを共に創っていくことが望まれると考えられる。